

其の折々 鶴岡學人

講話ではないが、かうした文字ものせてみたらと考へて、篋底から引き出してみた。

畏友陶工河井寛次郎氏と語る。氏は京都に於ける第一流の窯業家である。斯道に精進すること既に半生。名聲未だ大に顯はれずといへども知る人ぞ知る天下の至寶。康熙、乾隆頃の作品などは、全く氏の眼中にない、高麗燒の青磁をつくる位の事ならば、數年の昔に卒業して、今では宋窯元窯等といったものの堂奥に徹して、更らに自家獨得の創造に熱中してゐられる。小生の如き盲目には氏の作品の眞價はわからぬが窯變天目といったやうなものが、古名匠の作品以上に、氏の篋から出てくるのを見ると、何となしに頭が下がる。

二

さうした河井君が、理想を愛し素朴閑雅を樂

むのあまり、時に大氣焰をあげて、顧客を罵倒し去るの痛缺さがある。嘗て客あり『親の死目にもあへぬ』といふ程のいそがしい竈入れの日でもあつたからではあるが、客が、

『二三年前の君の焼かれたものがほしい、ありませんか。近頃の作品は多くは批評家に引づられ氣味で、ごうも面白くない。古い方がよい、古いのを出して下さい』

とやつたところ、氏は言下に考へて、

『二三年もすれば、今のこの作品がよくなるのです。古いのなんか一枚もありません。もし批評家に引づられるやうな陶工の作品なら、薄べらで見られたものではありません。批評家を引づるのが創作家の力である。創作家の苦しみは岡目八目の鈍眼にはわかりつこはありません』

まあかうした意氣で熱中する、創作につぐに創作を以てする。新しいのを出してきて、私は昔はかうしたものは出来ませんでした。やうやく今度できたのです。出来た後に、ハ、アかうした處に古の名匠の苦心があつたかど眼の前でその人に談話するやうな場合があるものですよ。

『歴史家はいろいろ考證して文書上で古人を見るが、私は私の實驗によつて古人に直接に談話してゐます。古人と同じ丈の苦みを重ねてはじめて、その境地がわかるものです』
と、かうした述懐を河井君から聞くと、机上で文書をひねくつて揣摩又は臆測をやつてゐる、我等の如き愚者は、境地未到の感にうたれて、冷汗百斗位の程度ではない。就中地理を學ぶものには、實地を見て歩くことによつて、文字の上の偽りを訂正しうることの多い點から見て、今更ながら教えられることが多いのを感じる。

三

河井君の説によると陶器程地理學的にその産

其の折々

物を制限されるものはない。土があつてはじめてそこに陶器や磁器が出来る。出来た以上はその郷土を外にして求むべからざる品質をもつ。出雲國には來町石といふ建築材がある、その石の粉を釉藥にすることによつてその地方色がある、栃木縣の益子の陶器に利用される水沼石のごときも全く全性質の釉藥によるものである。蓋しさうしたものを到る所に於て發見した無名の陶工がそこに業を開いてから既に二三百年、手細工でいかにも無細工に見える陶器の中に、何ともいひしれぬ純眞の陶産が出來てゐる。例令ば越前武生在の平の水甕（とら）、それは黒色に白い釉藥の流された陶器ではあるが、殆ど古い宋窯に近い味がある、しかもそれがたゞ無名無心の工人の手からつくられてゐるのだ。福岡縣西新町や石見の國の石州焼の窯からさへ、いかにも形や線の強い美はしい磁器がつくられてゐるしかし現代はさうした地方的の土産がその純眞さを失ひ、滔々たる世俗の新らしい工産物に驅逐され、將にその生命を奪はれんとしてゐる

の事情に迫られてゐる。單に陶器のみでない、地方の特色をもつ美しい工藝品の中には、とても素敵な製作品もあるが、それが近頃は都會の品物のために將に消えんとするものが尠からぬ世相となつた。

さうした慷慨談はさておいて、河井君の説明によると、京都の清水焼などの石焼の原料は天草石六十五%長石二〇%、蛙目カゲメ一五%、の割合である。瀬戸でも、伊萬里でも石焼ならば、さうした割合に配合するのであるが、こゝに伊豫國三島焼の原料、萬年石といふものがある、この石はさうした人爲的の調合でなくて、いかにもそのまゝで上記の三種が自然に配合されてゐる、従つてそのまゝ焼いて地方色をもつた磁器になつてゐる、自然の調合だから到底人爲の及ぶべからざる味を出してゐるといふことである

近頃は多くの工場でさうした土や石の原料を精選し水篩し、混合の方法に苦心し、色の白いものをつくるやうになつた、けれどもその結果は、全く地方色を失つて、陶磁器の木の味と

いふものを無くしてしまつた。之を工藝品化し多量生産化するかはりに、平凡墮落の界に沈淪せしめねばやまない。江州の信樂の土のごときも到底他國にては求められない土があつて茶壺に適するのであるが、それも近頃は何だか薄つべらになつて墮落の傾向に立ち、本然の味を失はんとしてゐる。

四

京にもよい土がある、しかし『石やき』の原料はない。けれども何とかして支那の石焼に似た模様のある焼物をつくりたいと考へた。さうした苦心の結果陶器に上薬をつけて石焼のやうな模様をやいた。それが古い清水焼である。茲に於てか果然支那にも朝鮮にも見るここの出來ない京都の特産が出來たのであつた。名工の苦心は思ひ出しても涙がでる、しかし今日ではさうした純眞な時代の手工品でなくなつて、多くは分業的になり多量生産により、一つの花瓶が生地をつくるもの、之をやくもの、之を仕上げのもの、模様をかくもの、十數人の手をへて出

來上る。生地と仕上げと、さうしてその書と、全く支離滅裂で自から品位の低下を來してしまつた。そも／＼の土のこねはじめから焼上げの最後まで一人の統制の上に計畫され所理されなくはうそだ。故に私はまづ京の土を尊重する生地に京のつちを用ひる。釉藥も決して珍らしいものを用ひないで、在來の上藥りをそのまゝに用ひる。しかし焼上げたものは、私一個人の産であつて、他人の企及をゆるさないものである。嗚呼實に陶業もこゝまでその本に徹して然る後に純眞の作をうるのではなからうか。

五

何れにしても生地が第一だ。まづかうした根本的の考があつて、然る後陶器がある。茲に於てか陶器の地理的分布のよつて生ずる理由も明になる。キチを知つて然して後陶器の特色を知つて、はじめて陶器の地理學的分布が論じられるのである。たゞこゝで注意すべきことは、かうした土がある故にかうした陶器が出來ると簡單に説明する丈けでなくて、同時にさうした土

を尋ねて、さがしあてた古人の苦心と、これを後世に發達せしめた後人の努力といふ要點にも深甚の注目を拂はねばならぬ。

然る後陶器業といふ人文地理上の現象が一通りは明にされるといふことになるのであるが、しかしそこまで徹底して物を識るといふことは決して一朝一夕のことで出來ない。統計書をみてグラフをつくつてみたり、地質圖から石英粗面岩の崩解地だから陶土があるなど、簡單に説明する程度ではいけない。勿論さうした低級の取扱が不用だといふわけではないが、同じ粗面岩の崩解地だといつても地方色がある。人のこしらへた陶器には更らに個性が加はる。千差萬別の中に共通したその地の陶器にも、も一つ時代の色が加はる。これを知りこれを學び、一見して陶器の産出地及年代や品位等がわかる程になつて、はじめて陶器に關する人文地理が明にせられるべきであらう。

予は陶器には全くの門外漢である。しかし河井君の陶器を見てから後に、五條坂の陶器店の

品物の俗悪さがわかりかけた氣がする。予はかうした研究家について名工苦心の跡を尋ねてみたり、土の良否を聞いてみたり、其他の多くを學んで然る後陶器の地理學的分布といふことを考へてみたいと思ふ。

陶器丈けではない。人文地理學のあらゆる問題は常に時と所と人との三者に關する複雑な關係が織りこまれてゐる。従つてすべてが歴史の中に生命を下してゐるのであつてたゞ表面的な分布のみの問題ではないのである。果して然らば我等はあまりに今日迄無知の暗に彷徨しすぎてはゐなかつたか、考へてみねばならぬことであらう。

六

昭和三年十月、相樂郡瓶原村に恩師内藤湖南先生の寓居を訪ねて教を乞ふた時のことである。恭仁の故京の跡、泉川を南の山腹に、萬卷の書を藏すべく白壁の倉庫をたて、靜かに炬火の如き史眼を以て、さうした藏書の中から珠玉を拾集してゐられる先生、一度御邪魔をすれば

御邪魔してはすまないが、何かしら一つや二つの智識を得て歸る身にとつては、先生の御迷惑位は敢てかまつてはゐられぬ。とにかく先生御免なさいで、二時間や三時間ブツ通しに四方山の話を受はるのか例である。

先生は物にこられる人である、北宋版の史記に千金を投じたり、唐代の説文の寫本殘缺に萬金を擲つといふ風であるから、藏の中を一巡さしていたゞく丈けで眼の正月になる。先生どうしてこれ丈け集められませんかと『マア三十年だ、はじめは中々本が買へぬが、二十年程たえず買つてみると大部よつてきたと思ふが、あと十年でグツとふえるよ』

私はさう聞く丈けで、自分の年を考へる。ハテこれから三十年かゝる。七十の年になつてもとてもだ。日暮くれ途遠しごころの話ではない及びもつかぬことだと參つてしまう。これは金さへあればといふ性質のものでない。これを集めうるための學問がある。眼がある。河井君の話ではないがキチがちがう。見る眼、つくる手

何れにしても六ヶ敷いことではある。

七

先生の居宅から南を見ると奈良と山城との國境の洪積丘陵が平板な臺地になつて中景をなし正面に三笠山の火山岩が居すわつてゐて、右の方遙かに生駒の雄姿が目に入る。眼下の近景に加茂の町がある、恭仁の都址がある。古い時代の條里がいかにも明かに河の向ふから、こちらへついてゐる。一筋、二筋、三筋、四筋。讀んでゆくと川の兩岸にやゝ條里のかけてゐる所が明治十八年の大洪水の跡である。宇大野はこの時大損害をうけ、仕方なく山手に移轉した、それで大野といつて、山に居るわけがわかる。

八

加茂の驛から先生の宅へゆく途中、木津川に今は壯大な吊橋がかゝつてゐる。橋をわたれば字船屋といふ村である。昔はこゝが船の津であつた。今はさうではないが郵便局がある。しかし木津川の水運は今日も猶笠置までは船を通ずるのである。平野の中に白帆をかけて、溯上す

る舟が、又この山莊の風致の一である。内藤博士はさうした過去の條里や故都の跡をみて、なせ我國の飛鳥の都が奈良にうつり、奈良の都から、難波の都、平安の都といふ風に移轉したかといふことを論じられた。曰く、

我國上古の奠都に水運の關係が考慮されてはなかつたが、大和の都には大和川の水運が有力な交通機關であつた。大阪灣から河内の國分までは船が通つた。故に其所にあつた餌香の市場が當時最大の商業市港であつたことなどを考へ合はして、大和川の帝都に對する水運の大に貢獻したことの想像がつく。しかるに其後上流の森林が無くなつて、飛鳥川は淵瀬たゞならぬやうになると共に大和川も河床が高くなり、自ら水運の不便が生じ、飛鳥の都は遂に北移せざるを得なくなつた。蓋し地氣漸く衰へたのではなかつた。

しかし奈良の都といつても水の手がわるい。ごうも木津川の水運によるには、奈良坂の不便がある。聖武天皇の恭仁京への御奠都は、さう

した不便から考へられたことで、恐らく建都當時の船屋の繁榮は想像に餘りがあると信ずる。しかし何分こゝは土地が狭い、やはり難波の都がよいといつて再び難波に移られたが。難波は海に近いが要害にかける、同じ淀川の水運によるのならばといふ點から、天智天皇は一たびその上流である滋賀の大津に移られた。やがて桓武天皇の長岡の都になつた。これは實に今の山崎に近い地點で淀川の水運を利用されるのであつたが、地勢上こゝもよくなかつた、遂に巨椋池の北加茂川の水運を擁する京都に移られた。今でこそ高瀬川の水は枯れ、高野川や加茂川の水は少いが、昔は多かつた、秀吉のつくつた高瀬の水運が後世まで利用されたやうに、奠都當時の加茂川の水運といふものは蓋し想像に難くはないではないか。

九

奈良から京へ移られた理由の一つに、史家は古い豪族や佛寺の傳統の力から逃れるといふことを述べる。しかし水運の消長と帝都との關係

を考慮したものはない。過去の水運と帝都との關係を君はどう思ふかといふのが先生談話の要點である。人文地理を學ぶものに取つて、かうした湖南先生の言説は何等かのヒントを與へないではおかぬであらう。

一〇

續日本紀天平十二年の條をみると、

皇帝等幸泰仁宮始作京都矣中略、五月幸河南觀狩獵。太上
天皇(元正)徙御于新宮、天皇奉迎河上、宴群臣于新宮。詔
移平城二市于泰仁宮、賀世山西大道以東爲左京、以西爲右
京、又賀世山東河造橋。中略

十四年二月又始開泰仁京東北道、通近江國甲賀郡七月行幸
甲賀郡紫香樂村、宮城以南大路西頭、與聽原宮東之間令造
大橋。中略

十六年正月詔喚會百官於朝堂、問曰泰仁難波二京何定爲都
云々。二月遷泰仁宮高御座並大橋於難波宮。水路巡漕兵庫
器械。

十七年五月發亥車駕到泰仁京泉橋。

十八年九月泰仁宮大極殿施入國分寺。

わづか六、七年の間の都ではあるが、こゝに橋を通ずること三、賀世山東より瓶原へ通ずるも

の一瓶原宮から東への大橋。恐らくはこれは短かい橋で、甲賀郡信樂への街道、三は泉橋、今の木津から上狛への間にかゝつてゐたもの（現在は鐵道の橋梁）があつたのであるが、水路の利用が著しかつたことは右の文の兵庫器仗の運道によつて證される。果して然らば東西水路の便にかぬるに、東北近江國から東國に通すべき要衝が、こゝに都を移された主要の原因であつたと考へてよいらしい。しかし今日では大橋のみしか再興されてゐないが、後年都を京都に奠められた後といへども、この奈良から信樂への要會であつたこの川の橋は、宇治橋や山崎橋と同様に、國家の手を以て永く架橋されたものである。

延喜式雜式に曰く

凡山城國泉河榑井渡瀬者、官長率東大寺工等、毎年九月上旬造假橋、來年三月下旬壞收、其用度以除帳得度田地子稻一百束充之

とある。假橋で半年間だけしかかゝらなかつたとしてもその重要視されたことは疑を要しまい

時に盛衰があり世に汗隆はある。山代の鹿脊山際に、宮柱ふとしまたて、高知らす布當の大宮川はまもなく國分寺に給附されたけれども、この地永く皇室の庇護に浴し、徳川時代を通じて猶、禁裡御料であつた。蓋し地理はさうかはるものではない。大地の自然が人文に及ぼす影響は悠久であるからである。

かうしたことは其折々の思ひ出である、後日の左券に記しておかねばならぬと思つて本誌の餘白を汚した。(完) (昭和三年十一月)

新著紹介

○本邦温泉論考

石川成章著 四六版二一四頁 寫眞版

九葉

古今書院發行

昭和三年十一月

定價一圓六〇錢

瀟洒な釘裝で、人の心を惹く書名を以て發刊された本書は著者の多年の温泉に關する調査を一冊に纏められたものであつて、温泉を學術的に論考した本邦唯一のものとして好い本書は必ずしも本邦の有名であるあらゆる温泉について論考はしてないが、本書を通覽すれば日本の大抵の温泉の真相を推知し得られると考へられる。なほ温泉の試掘に關する一章